

葉山嘉樹論ノ一ト

(一)

青野季吉「葉山の日記について」 昭35・1 『図書新聞』らによつて葉山嘉樹の「日記」の存在について紹介がされて以来、久しく待望されていた『葉山嘉樹日記』は昭和四十六年二月に筑摩書房から出版された。没後二十六年目のことであつた。それは葉山について関心を抱く者にとつての第一級の資料とも言ふべきものではあつたが、大正十二年の「獄中記」を含む昭和七年から敗戦の年の一月までにあつた『日記』を手にし得た時の感想には複雑なものがあつた。

小田切進は『日記』について「日常生活の記録が中心になつてゐるため、もう一步ふみこんで書いておくべきではないか」と感じるような「思考停止で記述が打ち切られてしまふ日もかなり多い」（『葉山嘉樹の日記』 昭41・8 『文学』）という傾向を指摘している。その「思考停止」の記述内容の余韻をたどる形で読者の恣意的な読みが働く可能性を多分に持っているとも言えるだろう。そして、そこに複雑な感想が生じるようにも思う。それは『青野季吉日記』（昭39・7 河出書房）の巻末に付載された中島健蔵の思ひ（『青野季吉の日記について——『人民戦線事件』以後の彼』）につながるものだとも言えよう。

* 浅田 隆

青野季吉は心の中で、あらかじめ抹消した上で日記をつけていたのではないかと思う。文字の裏を読むのが、そのころの習慣であり、必要なことでもあつた。書いている自分自身、自分の文章の裏を読んでいたともいえよう。青野季吉の日記の中にも、それが痛々しいほど出ている。

と中島は記している。青野の『日記』を読む中島の右のような読み、姿勢に対し、当代を生きていない者は、あるいは当代を時流に乗って生きた者は深読みすぎないという冷酷な批評をあびせることも出来る。あるいはまた、当代の現実を知らない者は、中島の読みの延長線上に身を置いて、例えば葉山の『日記』に身をすり寄せて行くことも可能なのだ。青野は「日記」を書き続けた理由の一つとして、

日記をかき始めた。これは巢鴨で決意したこと、日記がないばかりに取調べの場でどれだけ不利だったか知れない。

と記している（『文学五十年』 昭32・12 筑摩書房）。この文中に見える巢鴨とは当然巢鴨刑務所である。

ところで、葉山も「朝早く、スラスラと日記で調書が出来上る」と昭和十三年十月十五日の『日記』に記している。小田切進は青野による葉山嘉樹「日記」の紹介文中にある「とびとびに読んだところで

は、身边にかんずることが多いようである」ということばをうけて、先に引用した「思考停止」云々を言っているのである。

右の事情から言えることは、一つには自己の内面の記録としての「日記」さえ自由に書き記すことが出来ない状況があったということであり、時代の状況と抵触する内容については限度以上に書き記すことは危険だったということ。またもう一つは、「日記」が魂の記録というよりも行動のアリバイを立証するための現実的な役割を担っていたらしいということである。このような「日記」にかかわる側面を思うとき、「日常生活の記録が中心」であるのはむしろ当然であり、「もっと体験そのものの意味にふれて記録」するということは非常に危険なことだったと言えるだろう。しかし右のような事情の結果として内容が「思考停止で記述が打ち切られてしまう」ことになったわけではあるが、葉山に身をすり寄せつつ『日記』を読めば、思考停止の文章の空隙に葉山に対する読者の恣意的な願望を挿入することも出来ることになる。しかし中島は先の文中で「偽装転向」について、

なんらかの意味で仮面をかぶってシラを切っているつもりの人たちの中には、面が肉に食い入って、肉づきの面となってしまう苦痛があったはずだ

と述べている。『青野季吉日記』をめぐっての中島健蔵のこうした指摘は青野季吉を離れ、昭和十年前後から敗戦までの時代の社会的な広がりの中に解き放たれるべき指摘でもあろう。そしてこの時代の歴史や文学を読もうとする主体が常に遭遇せねばならない不可避の問題でもあろう。『青野季吉日記』についてのの中島の二つの指摘の間立って、読者が対象を主観的、恣意的な願望によって読み込むとすれば、対象を包摂する事実をいかようにも潤色することが可能である。

(三)

徳永直は「葉山嘉樹の位置——プロレタリア文学の開拓者——」(昭28・6『文学』)の中で、

彼の晩年の作品で、題をおもいださない(中略)が、この頃従軍作家で活動していた里村欣三のことをしのび、居村の青年たちが出征していく風景などがいた短編には彼のふくぎつな苦悩、晩年の心境をよく語っているが、しかし、この作でもわかるように「転向」の心境といったものにも『戦旗派』出身の「転向」のそれとはすこしちがっている。どっか「なだらか」である。ポキッと音をたてて折れるようなふうのものはあまりない。

と言い、また「葉山はどう転向してみたところで、林房雄のようにもなれぬし、また平林たい子のようにもなれないのである。」とも記している。ここに見える作品は「慰問文」(昭13・10『文芸』)を指しているように思うが、これによって見ると、徳永は「慰問文」の段階で既に葉山が転向していたと判断しているようである。ところで祖父江昭二は「葉山嘉樹論」(昭39・6『文学』)で

「慰問文」という作品がある。

おりから中日戦争がはじまり、戦地へいった友人宛の手紙という形式の作品であるが、たとえば葉山があの戦争に対して懐疑的であったことの例証としてこれをとりあげる批評がある。たしかにその点葉山は懐疑的ではなかったようにぼくにも思われる。いまは留保しておくが、場合によっては、そう断言できるかもしれない。

(傍点筆者)

と記している。この文中の傍点を付した部分は多分徳永の先の批評を指しているのだろうが、徳永に見られるような批評態度について、

『慰問文』という作品の面白さ、文学的リアリティというものは、果してそう例証されるところにあるのだろうか。」という態度をとっている。そして「慰問文」冒頭の文章構造

定村銀三様。

御身は北支に一兵卒として、東洋永遠の平和の為に戦つてゐる。

御身たちのおかげで、われ／＼は空襲を受けることもなく、まるで十年前と同じく、平和な日常の生活を享受してゐる。

に注目し、最初の文と二番目の文の間にある響きあひの妙について、一見「聖戦意識」につながるような戦争観を示しておりながら、「ここに使われている『平和』ということばをうまく移行させて、一見なんでもないような書き方をしながらも「先行するあの文章が読者を喚起してあわや結ばせようとした『聖戦』意識というイメージに事実上空洞をあげ」る効果を持っていることを指摘している。これらの部分に限定して見る限り、「慰問文」についての徳永と祖父江の見方は対立的である。しかし、二人が持つ葉山の全体像についてはさほどの開きは見られないようである。

葉山の本質部分に徳永は「彼は最後まで虐げられる人々の味方であった。プロレタリア的観点に弱かったとしても、少くとも虐げられる人々の味方であった」という傾向を見ており、また祖父江は「こういう表現は、国民をとらえようとして国家が上から提示し、おしかぶせようとする思想に対して、下から真面目にこたえようとしても、どうしても途中でくずれて、とんでもない方向に飛び出してしまうような、そういう表現であり、文体であり、発想ではないだろうか」もともと葉山自身はあるいは優等生ふうな真面目な文体によって表現される思想や観念を本気で信じこもうとした場合があったかもしれない。従つてそこに葉山の戦争否定的でない後退した思想を見てとって、あげつ

らうことは必ずしも間違いではないだろう。」と述べている。このように見てくると、二人の葉山観に本質的な相違があるのではなく、究極的には、葉山文学の本質的なものとして、ほぼ同じものを見ているらしいことがわかる。にもかかわらず、最初に見たように作品受容の姿勢にはかなりの相違があると言わねばならない。

右のような相違点の源は作品への期待の質の相違にあるように思われる。例えば、徳永が作品論を媒介にしながらも人物の思想を追及する傾向を持つている(論文の目的・テーマにもかかわらずはいるが)のに比し、祖父江の場合、

文学論としてなにもまず問題にすべき「思想」は、言えは作品そのものの「思想」であつて、しかもそれは、いわゆる作家の「思想」に還元できるものではないだろう。そこを早とちりすればこそ、非文学的な評価・判定をつい、ひょっとすると心ならずも、生み出してしまふのではないか

と述べているような姿勢を持っているためであろうと思う。祖父江が言うように、確かに一部では、作家の思想傾向(及び行動)を作品論の背景として無批判に導入したり、自伝的作品を伝記の中に無批判・無考証のまま導入するような傾向のあることも事実であり、また、作品論を作家の現実行動の思想性に依存する形で処理する傾向があることも事実である。作品空間と創作行為の主体たる作家とを截然と分離することは困難であるにしても、作品は作家の現実生活とは離れ、例えば無署名でも作品は文学的価値において独立した存在が可能であるような側面を常に持っている以上、作品を受容するに際しては、まず作品の独立性を考慮せねばならないはずである。とは言え、作品の中に意外と作家の無意識の世界が息づいている場合もあり、また日常生活者としての作家の私的・公的営為の中にも、自覚的でない、意外な

部分が露見している場合もあり、作品や作家の全体像はこれらの相対的な照合の中で一度は検討されねばならないことは言うまでもない。

(三)

赤城毅は「労働文学とプロ文学の結節点——葉山嘉樹『海に生くる人々』——」(昭43・12 『民主文学』)の中で後期の葉山について

往年の、変革的情熱をたっぶりふくませたメタフォリカルな文体は跡形もなく消失し、大自然の中に没我せんとする大乘仏教的、枯淡を意図した文体がとって代った。

国家権力の実体を手づかみにすることを、ついにはばむこととなつた気質にひそむ主観性と非論理性が、対政治的精神緊張に支えられている間は、自然に社会を人格に主体の方に強列に引きよせての芸術性豊かな前期文体をもたらしことが出来たが、ひとたびその緊張が失われると、同じその主観性の強い気質が、逆に人格を自然の方に強引にひきよせられてしまう後期の文体をもたらしした。

と述べている。葉山の文学的時期区分については未だ明確なものがなく、筆者の場合「移動する村落」(昭6・9・12)と7・2・9 『東京朝日新聞』執筆期間を前期と後期の一応の区切りと考えてはいるが、右の赤城の場合、多喜二唐毅の「あくる年、葉山は東京での作家生活をふりすてて、信州に落ちのび、やがてそこで帰農した」頃以後の作品を後期として問題にしている。

ところで、ここに見える赤城の葉山観についてはおおむね賛同できるところだが、「対政治的精神緊張」が後期には「失われ」ているとする点及び「枯淡を意図した文体」という文体把握には疑問が残る。ここで言う「精神緊張」とは具体的にどのような内実を持つものとして言われているのか、「枯淡を意図した」という場合、葉山の後期に「枯淡」

と呼び得る文体がどの程度あるのか、またそれは「意図した」ばかりで実現しなかったのか、等々の小さな疑問とともに、全体として、そこまで葉山を否定的にとらえて良いのかどうかという疑問が生じる。

「水雨」は昭和十二年の『改造』十二月号に掲載された作品である。この年は蘆溝橋における日中両軍の衝突(7月)により日中の泥沼的な全面戦争に突入した年であり、小林多喜二の虐殺に象徴される言論・思想の統制と弾圧は既に体制としての完成の域に達していた。ところで、このような状況下に書かれた「水雨」には「もう政治とは絶対に縁を切る！」という記述が見られる。このことばを額面どおりに読めば、政治とは今後一切のかかわりを持たない、という葉山の宣言とも受けとれなくはない。しかし葉山の存在認識は醒めており、個としての存在と政治とがどのような関係にあるかを葉山は知り過ぎるほど知っているようである。と言うのは、先のことばの直後に、

だが、私は今まで一度だつて、政治家になつたことはないし、なりたかつたこともないのだまして、私が政治と縁を切ると決まようが決めまいが、私の一時一瞬の生活も、政治の下にあるのだ。私の考へや決心などは全つ切り問題にはならないのだ。

と続けているのである。先のことばのみに限定してこの頃の葉山を見ようとするならば、「対政治的精神緊張」の喪失という姿も出て来るのかも知れないが、作家にとっての精神的な政治との緊張関係とは、決して現実的な政治的行為において計量し得るものではないはずであり、現象としての能動的な行為の側面によって見るべきものでもないはずである。本来それは主体が自己の存在認識に際して、社会の全体と個としての自己との有機的関係をどのように位置づけているかという点にこそ見られるべきはずのものであろう。こうした点から考えるならば、先に引用した二つの文からうかがい得る葉山は、政治を単に機構

的機械的なものとしては見ておらず、自己の日常的な存在が常に政治との緊張関係にあること、さらに、政治とは一個人の恣意的な意志によって絶縁し得るような簡単なものでないこと等をはっきりと自覚していると言えるだろう。「対政治的精神緊張」とは、作家にとって、あくまでも作品空間に見られるべきものであって、それも、単にそこに扱われている素材の先天的な方向性によって問われるべきものでもないはずである。

「氷雨」は葉山の後期によく見られる随想とも小説ともどもとれるような作品で、葉山自身も『日記』(昭12・11・3)には小説と記しながら「執筆目録」(『葉山嘉樹日記』巻末付載)には随筆と記している点からも、この作品の形態上の性格がうかがえるだろう。ところで作品の内容は、赤穂村における窮乏生活や魚釣りの際の子供との会話などをまじえたもので、当時の葉山の内面を何げない文章の中に封じ込んでいるようである。

十一月十九日の『日記』には「改造の広告にわが『氷雨』載っているのでホッと一安堵せり。」と記している。葉山にとって「氷雨」の掲載はかなり嬉しかったようである。

ところで、葉山にとつての「氷雨」をめぐるこの「安堵」感は一切何だったのだろうか。「日記」によるとこの作品は十月三十一日の体験をもとに書かれたものらしい。『日記』にはつぎのような記述がある。

午後民樹百枝を連れて鯉取り釣りに行く。
夕方雨に濡れて暗き田舎道を帰る。

釣りの途中雨になり、民樹、草の刈りたるを、川端の胡桃の木の下に居れと云、百枝に屋根を葺いてやり、その下で雨宿りして居れと云

ひ、自分では幼き手に二間竿を揺りてゐたり。
涙流れ来る。帰りに食ふ米なし。

暗くなつても黙々として釣つてゐる自分の気持を察してか、子等帰らうとも云はず、黙つて待てり。親子心中の雲囲気とはかくの如きものかと思つた。(中略)

子等先きに立ちドンドン急ぎ足に帰る。いつものように質問の連発をしない。オヤヂの様子が変だと思つてゐるに相違ないのだ。

帰つたらワイフが障子を貼つてゐた。

その夜、子等に与ふる飯はあつたが、自分等の分がなかつたので、魚は小原君宅に持つて行き、その足で小出君を訪ねた。小出君は酒も飲まずに飯を食つてゐた。

五円借りた。それで一升僕が買はうと云つたら、その金で一升買ひ、四合瓶に小出君の飲み分をとり、後をみんなくれ、金は別に五円札一枚出して来て貸してくれた。

米一斗麦五升買つたら八十銭残つた。

この夜久し振りにて酒にありつく。

このような自己の体験を作品化したわけだが、先の十一月十九日の『日記』に記された「安堵」は右の『日記』に見える窮乏感や十一月二十二日の『日記』に見える「夕方菊枝質屋に行き一円借りて来る。ガンドキを十銭買つて来て夕食菜にするような、現実生活上の窮乏に対する「安堵」であつたのだろうか。『日記』にはこの折の「安堵」の質について全く記されていない。確かに「氷雨」一篇でうるお

う稿料収入の額は当時の生活状況の中にあつてはかなりの高額であり、そこから来る生活への安堵感是十分に想像し得る。例えば荒っぽい単純計算ではあるが、『葉山嘉樹日記』巻末付載の「執筆目録」の「ノート『7』(昭和十二年十二月以後)以下の分については枚数と稿料

収入が記入してあり、これをもとに概算すると、「水雨」は十一月五日の『日記』によると二十一枚、「執筆目録」によると二十枚、四十円近い額になる（「ノート『7』」に付記されている「執筆目録」のうち、枚数と金額の記入してあるものを平均すると）。ただし『改造』の稿料については葉山の場合三円以上が支払われているようなので、十一月十九日に『改造』の広告で掲載されることを知った段階では六〇円近い収入を予想したかも知れない。従って、ここに記されている安堵感を生活の窮乏から来ているものだったと理解することも不可能ではなからう。生活についての窮乏感はきわめて主観的なもので、他者が云々することはこの場合あまり問題とならないだろうが、予想し得る葉山の年間稿料収入と「米一斗表五升買ったら八十銭残った（注||五円で）」というような物価、さらに十一月十七日の『日記』に記されている「里村夫人より軍事扶助が受けられるやうになつた、『日額一円二十三銭ですからどうか生活が安定しました』とハガキが来た。俺も兵隊になりたい。」という生活からすれば、葉山の実収入はかなりのものであり、窮乏感についての疑問は禁じ得ない。ただ、そうした他人の目からの客観的判断はこの場合問題ではなく、明らかかなことは、『日記』の随所に窮乏感を訴えているということである。

ところで同じ十二年度の『日記』の随所に

私は悲しくなつた。親の悲哀である。

国家も利己的である。部落も利己的である。

個人も利己的である。損はれたる国よ！

（三月二十六日）

何とも云へず一日不愉快なり。

キャンプを持って、妻子を連れて、川伝ひに原始民族のやうに生活して歩いたら面白いだろうと思つた。

思へば、人間はどんなに面白いと云ふことから遠くかけ離れてしまつたことだらう。

自分は自然の中にとけ込んでしまつた時以外には面白いと云ふことはない。

（八月二十五日）

地球にも自分にも愛想つき果て、

首吊るまでを魚釣りに行く

（十月十一日）

戦争とは人間の潰し値段の事である。

（十月十九日）

等々、さらに後にも引用するが『日記』の到るところに厭世的・虚無的な記述が見られる。このような厭世感や虚無感を單なる経済生活上の疲労と解することには問題があるように思われる。先に見た葉山の「安堵」感は、そうした経済生活上の困窮と切り離し得ないものではあろうけれども、同じ年の『日記』に見える葉山の精神上の鬱屈とも切り離し得ないものではないだろうか。

書けない。書き度くない。書くことが出来ない。書いてならぬことだけが頭の中にあるのだ。

（十月二十五日）

右は「水雨」に扱われている魚釣りでの出来ごとのあった日から六日以前の『日記』である。さらにその五日前には、

林房雄をやつつけねば腹収まらざる心地なり、されど、林輩をやつつけることがわが仕事にあらざることを悲しく思ふ。

チンピラ幫間ベン曲芸師共をして隔らしめよ。

俺の如きは歴史の動きに対しては、一匹の蟻か一尾の鮠の如きものなのだ。

子等よ健に育て！

父の如くなるなかれ。

とも記している。他にも、

変に事務局にわづらわさされてはいけぬ。何も書けない。

まつしぐらに真理に進め！ それでいけなければ、仕方がないのだ。子等よ許せ、妻よ許せ。

(九月三十日)

午後の便で東朝から原稿が帰つて来た。やはり時局に鋭くふれてはいけないんだ。自分には時代に迎合する能力はないのだ。

(二月十三日)

等々『日記』の随所にこれに類する記述が見られるのである。右の引用だけでも明らかだと思ふが、自分の仕事が順調でないことや原稿が掲載されない理由を社会的な要因として認識しているらしいことである。十月二十四日にも「わが頭、何か、わが体以外より持ち込みたるガラクタにてつまれるが如し」とも記しているように、それが単に主観的なものであるかも知れないにしても、葉山が一定の、「時局」と接触する意識を主観的には持っているらしいことが言えるはずである。

先に厭世感・虚無感と述べたが、

風船玉の萎むように、わが頭より生活力と未来への希望、何の故か飛び去る。

(十月二十三日)

ワイフ厭世観を起こし、生きてゐたくない、自分見たいなことを云ひ出す。無理なし

(十一月四日)

又ひどい嫌悪感！

くたびれた！ 何にもかにも！

(十二月十八日)

とも記しており、この頃かなり虚無的・厭世的な気分になっていたらしいことは明らかである。しかし、既に述べたように、ここに見られるそうした心象が、単に経済生活上の窮乏にのみ起因すると考えるのはあまりに表面的な理解にすぎないにちがいない。やはりもう一方に、先に見た鬱屈した精神が虚無的・厭世的な気分の一方の原因を構成していることは確かである。

そこで、遡って先の「安堵」について考えるならば、単純に生活的窮乏についての「安堵」ばかりでなく、葉山の意識(主観)からすれば、「時局」に何らかのかたちで低触する内容を封じ込めていたため「氷雨」の掲載を懸念していたと解釈することが可能である。『日記』によれば「一寸待て」(昭12・12・13 『帝国大学新聞』)は十一月十二日に脱稿したらしいが、この「一寸待て」は当時の林房雄のあり方に対する明確な批判で、林が進もうとする方向に「一寸待て」と語りかけようとする内容である。「氷雨」は「一寸待て」の八日前に脱稿しており、このような内容を持つ「一寸待て」と「氷雨」との時間的な関係から考えると、「氷雨」の内容が「一寸待て」の志向性ときほどの開きはなかったと考えてよいはずである。

「氷雨」は、魚釣りの帰途「お前たちはお父さんの先にお歩き」という形で私の前を歩き始めた二人の子供が、どんどん先に行ってしまった、私は考えごとをしながら歩いていることもあって、先を歩いているはずの子供たちを「見失った」ほどに遅れてしまう。そこで追いつこうとするのだが「私はノロくさく歩いた。子供たちに追いつかうと試みたが、駄目な事が分つた。一口に言つて終へば生命力が残つてゐなかつた」という形で、子供に追いつけないで考えごとをする自分の姿が描かれている。そして、この部分に雑多なとりとめもない思い(であるかの如く)として戦争の問題や政治の問題、「生きて行くのに大骨を

折ると言ふことに、熱意を欠いたとでも云ふ」ような自分の姿が挿入されている。子供達が帰りを急ぐ家には十月三十一日の『日記』にも記されているのと同じように米の入っていない「米櫃」があるだけなのだ。そして、このような窮乏について、

このやうな夕暮が、私たちの上に襲ひかゝるであらう、と云ふことは、昨日や一昨日から予感してゐた事ではなかつた。もつともつと永い前から分つてゐた事であつた。だが、それに対応する策を個人的に取る事が出来ると云ふやうな事柄ではなかつた。

と考える。このように、「氷雨」を見て来ると、魚釣りの帰りに子供達に遅れてしまったという事実は十月三十一日の具体的な出来事ではあつたにしても、体験を作品として構想してゆく過程に、葉山の真実の何ものかが挿入されているらしいことは想像が出来るに相違ない。

端的に言うると、「第二の国民」としての子供（小国民・第二の国民は當時にあつては常套語化されていた）、つまり未来を背負う国民としての子供の世界に追いつき得なくなっている、考えごとをしながら歩く今日の自分のあり方を重ねているという方向で、この作品を読むことができるだろう。そして、このような状況に立ち至ることはずいぶん前から予想されていたが、「それに対応する策を個人的に取る事が出来る」といふやうな事柄ではなかつた」ために、ずるずるとここまで引きずられて来てしまったと言うのである。さらに「あの子たちよりも、もつと不幸な子供たちが沢山あるし又、これからもつと、ずつと殖えるに違ひない」と言うことで、自分や子供を襲つているこの窮乏が単に自分達家族の特殊的情况なのではなく、さらに広く社会的・普遍的状況であることを述べる。この窮乏が具体的には何に起因するかについては触れていないが、それが「対応する策を個人的に取る事が出来」ないやうな形でやって来たものだという認識と、先の普遍性を持

つ情況だと言っていることなどを総合すると、自ら葉山の主張が浮びあがって来るはずである。

既に述べたように「氷雨」は日中戦争突入の年に書かれている。家永三郎『太平洋戦争』昭43・11 岩波歴史叢書）によれば「日本が戦争の大義名分として内外に公示したスローガン」として、「満州侵略の段階では『自衛権の発動』『満州国』については『五族共和』『王道楽土の建設』『中国との全面交戦に当っては『暴支膺懲』『更生新支邦の建設』『日滿支三国の結合』『東亞新秩序の建設』などの戦争目的が掲げられ」たやうである。これらの大義名分は戦争拡大に伴つて拡大し、さらに対米英開戦にあつては「大東亜共栄圏」を掲げることになる。戦争正当化の大義名分である以上当然のことかも知れないが、これらのスローガン群が常に自国内の平和と繁栄を自明の前提としていることは言うまでもない。

さて、くり返すやうではあるが「氷雨」には、空っぽの「米櫃」しかない家に向かつて帰つて行かねばならないやうな「このやうな夕暮が、私たちの上に襲ひかゝるであらう」という「予感」はずつと以前から抱いていたものであり、またそうした「予感」がありながら「それに対応する策を個人的に取る事が出来ると云ふやうな事柄ではなかつた」と記されており、また「あの子たちよりも、もつと不幸な子供たちがあるし又、これからもつと、ずつと殖えるに違ひない」ともある。「氷雨」は日中衝突から日中戦争に拡大する端緒となつた蘆溝橋事件から五か月後の作品であり、「午前八時三分、出征軍人を見送りに行く。十六七人あり、涙流る。」（八月十七日）とあるやうに、葉山の生活周辺から日中の戦場に旅立つてあろう人々が出征しているのであり、さらに、「日支事変の進行の為に、小説の想纏らず」（九月二十四日）といった状況や「国際耕地整理組合を作つて、各国で分配すれば、世界

も平和になるだらう。」(十月九日)といった考えを持っており、このよ
うな葉山の諸事情から先の「米櫃」への「予感」や「不幸な子供たち
が」ずつと殖えるに違ひない」という時代認識のことは考えるなら
ば、実は戦争正当化の大義名分を空洞化する働きを持っているのであ
り、戦争が決して国民の利益とかかわるものでないことを暗示してい
ると言えるだらう。

以上のような方向で「水雨」を読まない限り、「もう政治とは絶対に
縁を切る」という叫びとそれに続く存在認識に触れた部分との必然性
が意味を持たなくなり、さらには『日記』に記された厭世感・虚無感
・「安堵」といったものも宙に浮いてしまうのではないだらうか。
『日記』には「荒畑より『水雨』の読後感のハガキあり激励を受く」
(十二月十五日)と記しているが、荒畑寒村は、

(略)面白かった、と云つては悪い気がする程、深く心を打たれた。
君よ、気を落すな、勇気をもて。終りまで忍ぶ者は救はれるべしだ。
僕も、ともすると暗い深い穴蔵へ陥るるやうな感を免がれないが、
自ら奮つて勇気を出してゐる。

と書き送っている(浦西和彦「葉山嘉樹年譜」『葉山嘉樹』昭48・6
桜楓社)。発表時の荒畑寒村の作品受容こそ、今まで検討して来た
「水雨」の志向性を最も端的に証言しているのではなからうか。

今まで、葉山の作品の政治との精神的緊張関係を「水雨」の中に見
て来たが、葉山を非転向者の中に位置づけようとするものではない。
ここでは、葉山が政治との精神的緊張関係を自己の存在認識の中に保
っていることが明らかになればよいと思う。精神的緊張関係の持続と
いうことと転向とは、自らの問題なのだから。

浦西和彦は全集三巻(筑摩書房版 昭50・6)の「解題」で「この
作品から著者の文学的転向がはじまり、それが『暗い朝』(中略)で完

了したと思われる。」と述べている。

また森山重雄は『日本マルクス主義文学 文学としての革命と転
向』(昭52・2 三一書房)の「あとがき」に

思想を玩弄することはたやすいが、これを自己の内存在と化するこ
とは難しいと、今更ながら感じた。ことにこの系統の文学は、思想
と文学の両方にかかわって、こちらの思考の能力、人間としての力
量のすべてを試みされることになるから、おそろしい。

と述べている。駆け出しの筆者などが同感の意を表することなど不遜
かも知れないが、後期の葉山を扱いかねながら常にこの思いを抱いて
いる。

葉山晩年の友人松井恭平は、林房雄が「転向に就いて」(昭16・4
湘風会)の中で、「葉山さんの転向について触れた箇所を読んで『僕
には転向ということはありませんよ』と語ったことを回想している
(筑摩版全集『月報』② 昭50・6)。

葉山の戦時下の作品を見ると、前掲の徳永のことばのとおり「な
だらか」な形で客観的には明らかかな転向をとげていると言って差し支
えないだらう。問題は松井の回想にもあるように、葉山は転向の方向
に常に背を向けながら近づいているのであり、そこでの一歩一歩の歩
みの足跡としての作品の中に、葉山が何を訴え何を叫ぼうとしている
かといった血の声を讀みとらない限り、後期の作品群は飄逸・厭世・
虚無等々のその時々々の葉山の心理状態の表われた単なる文章にすぎな
くなるだらう。

注

1、十一月二十九日の『日記』によると、実際の稿料は五十二円五十九銭
であった。

2、「ノート『6』」付載の「執筆目録」に記載されている内容について、「ノート『7』」付載「執筆目録」の稿料の各誌紙別平均を乗ずると、昭和十二年一月以来「氷雨」の予告を見るに至るまでの稿料は、確実と思われるものだけでも三四七円四九銭になる。さらに浦西和彦作成の「著作年譜」を参考に概算すると四五〇円〜四八〇円。「執筆目録」に稿料の参考資料のないものについて、葉山の稿料の平均相場を参考に算出すると百円弱。総計するとこの年の収入はほぼ九百円内外あったことになる。

しかし、葉山は小旅行を度々するほか、消費生活の無計画さがあり、また友人に度々用立てたりで手持ちの金は常になく、その結果常に借金しており、稿料はその返済等々で消えているようである。

An Essay on Yoshiki Hayama

Takashi ASADA

Summary

This essay is an introduction of Yoshiki Hayama's literature concerning the convention in ideology.